

科目名	担当教員	授業方法	授業形態	履修者数	履修学年
身体と空間のデザイン	藤原 徹平先生	演習	対面・遠隔併用	60名	1年

### 【授業内容】

この授業は、本学の建築学教育の基盤となる授業の一つで、空間の言語を読み解き、分析する能力を育てていくことを目的としています。

建物のデザインは建築学を学ばなくても実は誰でもできてしまいます。誰でも毎日生活しているなかで、あたりまえのように建築空間と接していて、その経験からつくることもできてしまう。建築のデザインとは、そんなあたりまえの中で行われている創造行為です。また、一方で、誰でも経験できることを扱う点で普遍的な行為でありながら、建築のデザインは芸術表現・創造領域の1ジャンルでもあります。

本格的な建築の設計を行う前に、「空間言語」「環境言語」について理解を深め、今まで経験してきた空間や環境をもっとより精密に視るようになることが本講義の具体的な目的になります。

あたりまえに接してきた環境から意味のあるものを発見する視点の理解、観察力、観察したものを測ったり分析したりする習慣、測ったものを構造的に理解する方法とその経験を、毎週の課題を通じて獲得していきます。

また、空間を組み立てる基本的な知識や技術を獲得してだけでなく、考えたことを伝えるプレゼンテーションの練習を行います。

### 【授業の実施方法】

リアルタイムの遠隔による授業では、事前に出题した課題をグーグルスライドに貼りつけて提出。そこからセクションされた20名がオンラインで発表、教員とTAの複数名でクリティークします。クリティーク終了後にミニレクチャーを行います。トータル120分の講義。優秀者の課題を集めたスライドをPDF化し、教材として活用します。毎週の学生の演習成果をそのまま生きた教材として活用することで、課題への意欲と好奇心を刺激する形としています。造形演習は対面とすることで、遠隔と対面とのメリハリがある状態をつくっています。

### 【授業準備にあたってのポイント・工夫した点】

#### ● オンラインと対面の使い分け

本講義で出题する課題には二つのタイプがあります。

一つ目が、学生それぞれが人生の中で経験してきた環境や、課題のテーマに沿って都市を彷徨い発見した環境を、観察し図面・ドローイング・テキストでプレゼンテーションする課題です。こちらは、オンライン講義で実施しました。教室で行うとどうしても教員／プレゼンテーションする人／聞く人という非対称性が生れてしまいますが、オンラインだとフラッ

トに議論ができる感覚があります。また、オンラインでグーグルスライドに提出をしてもらい、セクション作品をPDFで毎週学生に配布しています。そうすることで、他の学生の手法を毎週の提出の中で学び、相互学習をしていくプロセスを時間差無く取り入れることができ、対面で実施するよりも表現力や観察力の底上げにつながっていると感じます。今後コロナ禍が明けてもオンラインで実施しようと考えています。

二つ目の課題は、造形演習です。横浜国大の建築学科は習作模型に対する指導に対してしっかりしたメソッドがあります。たくさんの習作模型を持ち寄り、模型の差異を教材にして学んでいく方法なので、対面で実施する必要があります。人数を絞るために、授業時間を二つにわけ、2グループにわけて講義を実施したのですが、それも効果があると感じました。演習における教員と学生の比率の重要性を改めて感じました。

## ● オンライン講義での工夫

### 1) 課題の発表

毎回の授業では、セレクトされた20名の学生が課題を発表しますが、その選考においてまず重要なのは、「空間言語」「環境言語」に対して分析的であるか、論理的であるかということと、人に見せるために美しく丁寧に時間をかけて作業に取り組んでいるかということです。この視点で毎回選んでいます。感性的な視点でのセクションも加味します。

選ばれた課題に対して、教員とTAの複数名でクリティークしますが、クリティークは事前に打ち合わせはせずに、TA2名それぞれの視点で選んでもらい、TAが選んだ視点も講義で発表してもらっています。TAにとっては、クリティークに参加することで彼らの教育にもなり、学部生からすると大学院生のレベルの高さを理解して、学習意欲につながります。オンラインになることでTAと教員間での対話の質と量が高まったように思います。なお、本学の建築デザインの大学院は全国の大学から入学希望があり、半数以上が他大学出身者です。その中でも優秀な学生をTAとして選出しています。できるだけ他大学から進学してきた学生と本学出身の学生を混ぜ、多様な視点からの議論ができるようにしています。

### 2) 大人数クラスの「授業の質」の担保

毎回どの学生がセクションされているのかわからないという点で皆緊張感を持ちながら取り組んでいると思います。また授業の最後に次の課題の説明と今回の課題についての思考を深めていくための建築理論や哲学書などを解説する時間を設けています。どれも大学院レベルの内容のものばかりを解説するので、学習意欲がある学生にとっては非常に面白いはずですが、一方でついていけない学生もいると思いますが、そこは気にしていません。学生に合わせず本当に重要だと思う内容を講義するようにしています。